

## 「春の小石川植物園(6)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋



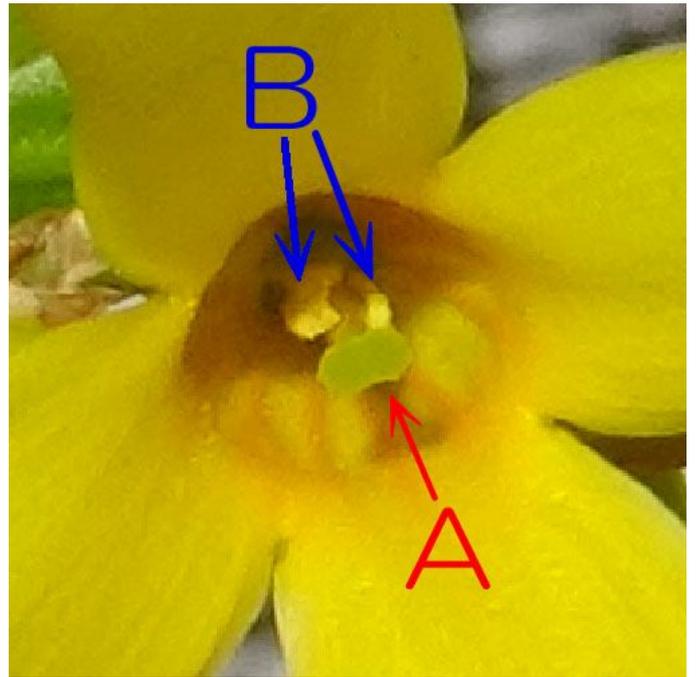
植物園の段丘崖の下に、黄色い花がたくさん咲いていた。今度は間違いなくレンギョウのようだ。小石川植物園では、特別な区域を除いて、柵やロープがないので、植物のすぐそばまで寄って観察できる。教育的にも非常に優れていると思う。



「レンギョウ」 *Forsythia suspense* は、モクセイ科の灌木で、キンモクセイと同じように4花弁の合弁花で、雄株と雌株が存在する。キンモクセイの場合、日本で植えられている樹はほぼ100%が雄株で、雌株はめったにないので、果実を目にすることはまずない。これは、キンモクセイの「花の付き」が、雄株のほうがずっと良いことが理由である。

しかしレンギョウは、雄株も雌株も「花の付き」にあまり差がないので、均等に栽培されている。レンギョウの花は、ほとんど下向きに咲くので、こうして枝の下に入って目を近づけて観察しなければいけない。下から入ることを好む、ハチを誘っているのだろう。

レンギョウは「雄株と雌株がある」と書いたが、実は厳密には「雌雄異株」の樹木ではない。これは、レンギョウの花の中心部を観察するとよくわかる。



写真はレンギョウの「雌花」である。確かに雌しべ(A)が突出しているが、不思議なことに雄しべ(B)も存在する。一体、どういうことだろうか？



別の角度から見ると、花弁の外に出ているのは、雌しべだけとわかる。実はレンギョウの場合、雄花にも雌花にも、雄しべと雌しべの両方が存在するのだ。雌花は雌しべが長く、雄花は雄しべが長い。これは、自家受粉をできるだけ避ける為の形態なのだろう。しかしいざとなれば、自家受粉も可能(※)という作戦だ。見慣れた花もこうして観察すると、一層興味深い。

(※) 自家受粉で結実することは稀である。